

茶の湯文化学会会報 No.58

第58号 / 2008年9月30日 丁606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

会員募集のお願い

神谷昇司

今年度副会長のお役をいただきました神谷昇司です。

平成五年（一九九三）十月に発足しました茶の湯文化学会当初より維持会員として入会しております。最初に趣意書が届いた折、茶の湯を生涯のライフワークとして研鑽していこうと志している者にとって、さまざまに分野から茶文化を考えるこの学会の発足は意義深く、茶の湯文化のためには大切な活動であると感じました。

平成六年度の会員数は九〇四名です。七年度には九三〇名、八年度には九四七名でした。九年度には八七四名と七三名も落ち込み、十年度からは八三六名、八四六名、八四一名、八三一名、八三〇名、八三五名と八三〇名前後を推移して十六年度には八〇一名と約三〇名減少して、十七年には七九九名、十八年には七三八名と六〇名ほど落ち込み十九年度には七四三名として今年九月十一日現在七五五名です。実際ここ数年五〇万円ほどの赤字財政となっており、その危機感から少しづつ持ち直しをしています。

今年度の新入会員は五一名ですが、昨年に比べ十二名の増加ということは四〇名ほどの会員の会費が滞っている状態です。ご高齢で退会された方もみえまじょうが、魅力を感じなくて退会された方もおられること

と思います。

谷会長から副会長の推薦をいただいたときはその器でないとお断りしましたが、「順番だから」といわれますと来年六〇才になる私も少しはお役に立てればと思ひ、引き受けました。

会務担当で、会員拡大を重点的にといわれて、はじめて大変な危機に陥っていることを知りました。

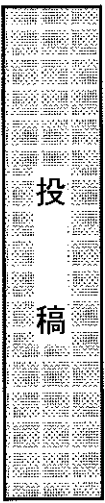
名古屋で東海例会を発足させたのが平成十五年です。この立ち上げに精力的に動かれましたのが前副会長の戸田勝久先生です。徳川美術館の佐藤豊三先生と愛知県陶磁器資料館の神崎かず子女士の三人が受け持ちを夫々担当して、会場は私の前任教である名古屋女子文化短大（現名古屋文化短大）、ここは名古屋駅から地下鉄で七、八分と交通の便がよく、現在も非常勤講師で勤めておりますので二人の助手の先生に受付、会場設営などをお願いして学会員三名と二名の短大関係者のご協力で大変順調に運営されています。

東海例会のおかげで名古屋の会員数は増加しています。平成十四年五月三十日が第一回例会です。年四回、基本的に四月、六月、九月、十一月の金曜日、六時から九時、二名の講師の先生をお願いしております。

学生会は無料、臨時会員は千円いただき、先生方の交通費、資料代としておりますので例会によって赤字になる場合もあります。今年度は赤字解消と会員募集を兼ねて「茶文化を楽しむ」と題して現代の闘茶を升半茶店の横井常務にお願いして実施しました。煎茶、ウーロン茶、番茶、緑茶を飲み比べましたが、簡単そうでなかなかあたりませんでした。

会員募集の第一段として六月東京での大会、総会の折、事業報告の中で赤字財政を申し上げ、参加者に申込書を配布しましたが、予想に反して三名程度の会員入会でした。

六月二十九日今年度第一回理事会（拡大委員会）において会員増加に向けた意見が様々出されました。その後、吉永幹事から八月はじめに日本茶インストラクター協会の会報に茶の湯文化学会の案内状を同封させていただく提案があり実施しましたところ、八月中旬に入会の問い合わせが十件ありました。何よりもよかったのは中日新聞の静岡総局から問い合わせがあり、八月八日付け「夕刊茶況」と題して会員募集の記事を掲載いただきました。ちようど理事会で浜松での例会を立ち上げようかと企画しているさなかでしたので、記者とのつながりもできましたので、よかったです。



千利休。早春に咲く連翹の花に、椿の花を取り合わせて

米村孝一

京都府乙訓郡大山崎には妙嬉庵がある。この寺は明応の頃（一四九二〜一五〇〇）、山崎宗鑑が建立したことで知られている。妙嬉庵の境内には「待庵」があり、現存する茶室は千利休が造った二疊の茶室として名高い。だが、この茶室に利休がどのような「茶花」を生けたかを知る人は少ない。

『立花訓蒙図彙』は元禄九年（二六九六年）に刊行された花書。同書は千利休をはじめ、古田織部、小堀遠州といった、茶の湯の宗匠たちが床の間に生けた、抛入花を多数載せている。その中には利休が「待庵」に生けたと思われる抛入花を今に伝えている。

『立花訓蒙図彙』三巻の内題は「抛入百瓶之花形二之巻」。同巻に収められている絵図の頭書きには次のような秘伝文を伝えている。この抛入花は、山崎の妙嬉庵の同床に、千利休、連玉（レンギョウ）に太白椿を取合せまき所に成る程大さわやかに生けおかれ

思います。

また、ベトナム研究会の参加者に会員募集をお願いしました。私も初めて参加できましたが、二十七名の参加者構成はさまざまで学会の縮図となっています。学会メンバーでなかった参加者が入会希望をもたれましたので、参加者全員に入会案内を送付しました。やはり出会える機会に直接お話ししてお願いするのが一番よいと思います。

次に八尾幹事から私立大学を中心にした本学会への団体加入への提案と芸能史研究会

◎都道府県別会員数 平成20年9月現在

北海道	3	滋賀	14
青森	0	京都	149(5)
岩手	0	大坂	35(1)
宮城	7	兵庫	34(1)
秋田	1	奈良	11
山形	1	和歌山	1
福島	5	鳥取	3
茨城	10	島根	3
栃木	1	岡山	8
群馬	2	広島	9
埼玉	27(1)	山口	3
千葉	29(1)	徳島	1
東京	163(15)	香川	3
神奈川	44(2)	愛媛	5
山梨	1	高知	26(7)
長野	4	福岡	12
新潟	11	佐賀	0
富山	4	長崎	3
石川	9(1)	熊本	5(1)
福井	5	大分	2
岐阜	8(1)	宮崎	1
静岡	14(3)	鹿児島	2
愛知	57(12)	沖縄	1
三重	10	外国	8

平成20年度新入会員は括弧の中に内数で示してあります。新入会員51名の内訳 学生会員7名 普通会員44名

『立花訓蒙図彙』所収 米村孝一 蔵



しを、洛陽のすき人、是を移（写）しとめて、此花形にたびたびやつしみれども、思わしからずと。名人の生けかたにならずみ、なれぬ諸々の花形をおぼえてころを生けると也。

この絵図は、乙訓郡大山崎に建つ妙嬉庵の床の間に、千利休が、連翹の花に白玉椿の花を取り合わせて生けたものを写し取ったもの。茶室の狭き床の間（とあるところから、妙嬉庵の境内に建てられた二疊の待庵の床の間に生けられたものと思われる）には長方形の敷台が置かれ、その上に細口の壺が花器と

員への呼びかけの提案をいただいております。順次取り組んでいきたいと思っております。ほかに大学茶道部への呼びかけも検討しております。

どちらにしましても会員一人一人の呼びかけが最大の成果と思います。ぜひ皆様ご協力ください。そして何かよいアイデアがありましたら事務局までご提案ください。よろしくお願いたします。

して据えられていた。細口の壺には黄色の連翹の花が床壁いっぱいになりばめられるかのように入れられ、その姿は見事であった。しかも抛入花を拝見した人の気分を晴れやかに爽やかな気分にしただけでなく、言葉に言い尽くせない感動を与えてくれる不思議な魅力を秘め持っていた。

利休が茶席に抛入れた生け花を写し止めたのは京都に住む数寄人。彼はこの花形をもとに、何度となく連翹の枝を切つて来ては生けてみた。だが、利休が生けたように枝が収まらず、また思うような花形に生けることができなかつた。

「名人が生けた抛入花はめつたに見ることの出来ない作品である。だから、その抛入花を密かに書き写し、その花形の絵図を手本として生けてみた。だが、とことなくしつくりとしないものがあるのは何故だろう。」

所詮、私が生けた抛入花は見た目は同じであつても、利休が抛入花に込めた思いをこの私は、抛入花に表し得ていないのだから仕方ないことだ」と、呟いたそう。ほの暗い茶室は夜明け前の東の空を思わせるものであつた。茶室の泥壁の床の間いっばいにちりばめられたかのように抛入れられた

連翹の花。その根元には「太白椿」が取り合
わせて生けられていた。太白椿とは、白玉椿
の異名か？

連翹の黄色い花は、あたかも夜明け前の東
の空に輝く星座の様であった。また、連翹の
枝は流れ星を表しているかのようにも見えた。

その中であって純白の白玉椿の花が花器の口
近くに生けられていたが、その姿は東の空に
ひとときわ光り輝く金星を思わせるものだった。

まだ寒さの残る初春。東の空に一際輝く金
星。またの名を「明けの明星」。その金星に、
利休自身の思いを重ね合わせ、彼の願いを託
して抛入れられていたのが、この抛入花。そ
こには利休が目指した世界、つまり戦のない
平和な世が、白々と東の空が明けていくよう
に終わりを告げようとしていることが表され
ていた。その抛入花を前にして、心から喜び
を噛み締めている利休の姿がそこには見てと
れる。

だが、現在『立花訓蒙図彙』が載せている、
利休作の抛入花に注目する人は少ない。それ
は同書が伝える抛入花が、茶会記等に、いま
だ記録された書物が発見されていないためだ
と思われる。

さて、私蔵の『齡花集覽』には、初代池坊

専好（？）一六二一）が編纂した『古哲の花
形』が収められている。

『齡花集覽』とは、加藤政治が寛政六年（一
七九二）に編纂した、茶の道・花の道の秘伝
を今に伝える叢書。同書には、初代池坊専好
が池坊家に一子相伝として伝えられていた花
の道の秘伝が収められている。書名を『古哲
の花形』と言い、その末尾には利休が定めた
『古哲の花形四箇条』が追加され、別伝とし
て伝えられていた。

『古哲の花形』が最初に載せていたのは『至
然天地之事』と題する抛入花。その抛入花を
初代専好の言葉借りて説明すれば、

「抛入花とは、我が国の花の道の先人が自
然界の根本原理を理論的に追求した結果得
られたことを、花（植物の姿）を借りて表
したものだ」

であるという。この抛入花の絵図には「守
」の文字が書き入れてあった。

利休は、花の道の師匠であった初代池坊専
好の高弟。（利休が初代専好の弟子であった
ことは、当会報No.四三号参照）そのことを
思えば、勿論、利休は『古哲の花形』が伝え
ている深い意味を当然知っていたはずで、そ
の意味を心に留め大輪の椿の花を花器の口近

くに生けられていたのである。

花の道の先人は、椿の花は大輪でありなが
ら自ら目立とうとはしない。そのことは「他
を、守り育てる」ことに通じることだとい
うことを悟り知った。その意味を後世に伝える
ため、花器の口近くに生けた椿の花に「守」
の文字を書き添えていたのである。この「守」
の文字には、

「椿は大樹であり、しかもその枝には大輪
の花を、枝が撓うほどたくさん咲かせる。

にもかかわらず、椿の赤い花はよく観ない
とその存在にすら気づかない。それは、椿
の花が他の花と競い合う心がないために人
に気づかれることなくひっそりと花を咲か
せることができるのだ。そのことを誰から
も聞かれないで気づくことは難しいこと
だ。ダイヤモンドの原石だって、磨かなか
ればただの石ころ。磨いてこそ光り輝くの
だから。私も心を磨いて光り輝きたい。そ
うして光り輝くことができたとしても、
椿の花のように他と競い合うことのないよ
うに心掛けたいものだ」

との意味が込められていた。
千利休が生けた抛入花。この抛入花は池坊
家に代々伝えられてきた「至然天地之事」と

題する秘伝の花を心に止め生けられていたの
である。そのことを思えば、利休が抛入花を
もつて後世の私たちにどのようなメッセージ
を伝えようとしたかは明白である。

「戦のない平和な世こそ、すばらしいのだ。」
利休の一生涯をかけた戦いは、このことに
尽きると私は思う。

参考文献（筆者蔵）

齡花集覽 加藤政治編纂 寛政六年筆写
元禄九年刊行



東京例会

（平成十九年九月二十九日）

「服部山楓とその師・式守蝸牛」

宇野千代子

サンリツ服部美術館（長野県諏訪市）は、
国宝「白楽茶碗 銘 不二山」をはじめ、茶
道具の優品を収蔵する私立美術館である。同
館の茶道具は、服部時計店の三代目社長であ
り、諏訪精工舎（現セイコーエプソン）の会
長でもあった服部正次（号・山楓 一九〇〇
〜七四）がかつて収集したものであった。な
お、正次の長男・一郎（一九三二〜八七）セ

イコーエプソン元社長）は西洋近現代絵画を
好んで集め、同館では一郎の西洋絵画コレク
ションも収蔵・公開している。

この発表では、昭和を代表する実業家茶人
の一人である服部山楓の茶の湯とそのコレク
ションの特徴について、山楓が三十歳代から
四十歳代前半に指導を受けた師・式守蝸牛（一
八七五〜一九四六）との関わりを中心にお話
しし、昭和期の茶の湯の一面を眺めてみた。

近代の茶の湯を牽引した実業家茶人たちは、
いわゆる近代教習者たちのなかでも山楓は最
後の世代に属する。山楓が茶の世界に入った
のは、岳父・塩原又策（号・禾日庵 一八七
七〜一九五五）に誘われてのことであった（服
部正次「インタビュー 先輩を語るⅡ『和敬
清寂』に生きる大茶人」『財界人思想全集
第一〇巻 財界人の趣味』ダイヤモンド社、
一九七一年）。塩原禾日庵は製菓会社三共
の創業者で、茶については昭和初年頃から益
田鈍翁の年若い茶友として小田原に招かれる
ようになったという（塩原又策『三共思ひ出
の四十年』高瀬誠三郎編、一九三八年）。

この塩原禾日庵と服部山楓を教えた茶の宗
匠が、式守蝸牛であった。「山楓」の号は、
蝸牛の号「五楓」から二を引いて「山」の字

をあてたもので、そこには師弟関係の篤さが
うかがわれる。蝸牛は東京茶道会の前身、茶
道協会の創立時からのメンバーで、大正・昭
和初期にかけて東京を代表する宗匠の一人と
して活躍した。

蝸牛は自邸の茶室・蘿装庵を特に好んだと
いう。蘿装庵は二畳中板の柅びた茶室で、山
楓はそこでの思い出を蝸牛の追悼文集『楓の
昔』に寄せている。

蝸牛はまた茶飯釜による柅びに徹した茶事
を好んだことでも有名であった。当館の収蔵
品の中にも茶飯釜があり、山楓が師から受け
た影響が偲ばれる。

山楓が蝸牛の指導のもとに行った茶が、柅
びを志向していたことは、仰木政斎が著した
『雲中庵茶会記』からも知ることが出来る。
例えば、昭和十五年一月二十六日夜、山楓は
蝸牛と連名で塩原邸の茶室禾日庵において茶
会を開き、客に松永耳庵、田中親美、栗田天
青、仰木魯堂、仰木政斎を招いた。山楓の炭
手前、蝸牛の給仕による鴨雑炊のふるまいの
後、茶席にいられた掛物やその他の道具
組に、政斎は「流石江戸時代より今日迄東都
宗匠の一人者蝸牛翁に師傳される上、この合
作近來稀の雅筵である」「何と云ふ寂びの組

合せか、雑炊後のこの道具には一同侘家を自任せる連中もこの合戦に一敗顔色なく、名酒の酔もさめぬ有様」と記している。

さらに『雲中庵茶会記』には、その後蝸牛が没し、山楓の茶が侘びから離れていった様子や、現在サンリツ服部美術館に収まる重要美術品・重要文化財などの名品がそれぞれ茶会のためにふさわしい心をこめて用いられていた様子も綴られている。例えば、昭和二十五年に山楓が父金太郎の十七年忌に際して催した茶会について、「御先代の御報いの為ならんも、日頃茶は主として侘び茶だけに、今日のお道具には、流石の連客も時計王服部さんと感激せられた」と、また昭和二十七年、立太子札を祝って開いた茶会において山楓は紹陽茄子ほか名器の数々を用い、政齋はともに招かれた畠山即翁の感想として「山楓氏も侘より本格的茶に進展されし事をたたえられ、茶道の為、喜ばしいとの讃辞であつた」と記している。

「茶道と日本らしさと性別」

スラク・クリステン

本報告は、社会学からの研究なので、茶道というより、お茶の世界における人間関係、

社会的な課程を取り上げる。現代茶道の一つの特徴は、日本のものと女性のものとよく知られているので、性別（ジェンダー）と日本らしさ（エスニシティ）を分析するための豊かな現場である。

まず、一つの事例を紹介する。これは、ある東京の中学校で二〇〇七年一月に行われた「ゆとり教育」の「居場所」プログラムの一環としての茶道のデモンストレーションである。女性のボランティア三人が「スズキさん」の指導のもとで、二年生に二時間程度の茶道のデモンストレーションをした。二つのクラスを担当が生徒を男子と女子の組に分けて、最初に四十六人の男子を対象にし、次に四十人の女子を対象にしてデモンストレーションが行われた。教室の前部分に畳を敷き、その上に風炉を置いて、臨時の茶道スペースが作られた。デモンストレーションは、自己紹介の後、五分の裏千家流のビデオと薄茶の点前を見て、皆がお茶とお菓子をいただくという順番だった。

男子への説明では、明確なジェンダーに絡む発言はなく、お茶と日本の精神の関係がただ紹介された。「今日は、ゲスト・ティーチャーの方をお迎えして、茶道、和の心に親しむ、

ということをやりたいと思います」と担任教師が述べた。しかし、女子の場合は、お茶は即座に日本らしい女性らしさと礼儀や日本の文化に結びつけられた。

「日本の女性という言葉があつて、今日は礼儀正しいということでも先生の話しがありましたね。それと日本の文化。本当に長い歴史がある日本の文化を短い時間なんですけどね、味わってもらいたいと思います」と述べた。男子の場合、お茶は象徴的に日本と結び付けられたが、女子の場合、お茶を通してより良い日本人、本格的な女性になれるという可能性が指摘された。

さらに、女子も男子も、マナーの育成の対象であつたが、扱いには相当な違いがあつた。お茶が出された時に、男子がさわがしくなり、説明をしているスズキさんの声が聞こえなくなり、スズキさんは叱り始めた。「君たちの先生が、いろんなことをちゃんと教えていると思います。それに、君たちがちゃんと応えられないんだわ、礼儀に反しているんです。日本の心にも反しているんです。日本の心は反しているんです。礼儀に反しているんです。分かりました？」と言つた。お茶は育成の道具として使われて

いる。生徒の精神を粹づけることが主眼となっている。つまり、日本の心と礼儀がないとして、日本らしさへの言及がなされ、礼儀作法とは、相手を思いやることと見做されている。お茶はそれを達成する方法だと提案されている。

女子の場合にも、お茶が教育の道具になつたが、身体の問題と捉えられた。特にお辞儀の仕方が取り上げられた。スズキさんは、女子生徒に対して、「ゆかたを着たことはあるか」また「どのように着るか知っているか」を尋ねた。お辞儀の練習の後、「さあ皆さん、このことを覚えておけば、もしもこの夏着物を着たら、男の子達は、なんて可愛いつてあなたのことを思うわよ」と言つた。女子も礼儀を教えられたが、問題は精神的ではなく、身体的であるとフレームされた。あえて、「日本的」と言及されることはなかったが（つまり、「日本のお辞儀の仕方」が教えられなかった）。この段階で、女子はどのようなにして「日本的な」女性らしさを身に付けるかということを教えられた。

これらの事例は、茶道は、日本らしさを説明し、その特徴の限界を定め、良いメンバーが持つ特別な行動を育成するために使われう

るか、ということを明らかにしている。さらに、この過程はどうやってジェンダー化されているのかという点についても焦点をあてている。男子の場合、「お茶は精神的なものだ」というフレームが使われた。一方、女性が身体の修養に基づいて日本の女性らしさを育成することを奨励された。

この二つの場合から、日本人であるかは、「はい」か「いいえ」かのものというより、程度のものであることがわかる。日本の心を失つた男子は、一時的に良くないメンバーであると受け取られ、恥ずかしい存在とされた。女子の場合にも、恥ずかしさが使われて、綺麗ではないしぐさをする可能性について指摘された。そして、お茶がその不適当なことを解決する手段として提案された。

（平成十九年十二月一日）

「屠本峻の『茗笈』について」

高橋忠彦

明末寧波の文人屠本峻の『茗笈』（一六一〇年頃）は、その特異な体裁のため、正当に評価されてきたとは言いがたい。全体を「遼源章」より「玄賞章」にいたる十六章に分け、それぞれ『茶経』の一部を「経」として掲げ、

それ以降の茶書の引用を「注」として付す、一見『茶経』の注釈であるかのような形態は、後世の評者たとえば『四庫全書総目提要』に「紛紜錯乱」とまで言わせた。たしかに異なる時代の資料を切り貼りしてまとめるということに無理はある。しかし中国では伝統的に、「類書」と呼ばれる、先行資料の切り貼りをまとめた書物が存在するので、その点だけで『茗笈』を批判するわけにはいかない。『茗笈』があえてこのような形式を選んだのは、唐から明末まで発展変化を続けてきた複雑な喫茶文化を、『茶経』を始祖として権威付けたいので、なんとか体系化しようとする積極的な意図からだと考えるべきである。

その全十六章の内容は、多少の齟齬はあるものの、比較的妥当なもので、製茶・喫茶の知識や、茶の美学をまとめている。さらに注目すべきは、屠本峻自身が書いた「贊」と「評」である。前者は四言四句からなる擬古的な韻文、後者は短い散文で、精読すれば、屠本峻の思想を向うに足るものである。その他、屠本峻の自序、『詩経』に擬した四言詩の「南山有茶」が付されていて、これも参考になる。

そのような部分から、屠本峻の茶の思想の

特質を考えてみると、次の二点が指摘できる。
第一は、仏教色が濃いことである。「南山有茶」は、「(茶を以て)古先生(仏の異名)に礼す」で終わるし、相宜章の「評」に引く屠隆の『清言』の「茶は熟し香は清らかに、客有りて門に到るは喜ぶべし。鳥は啼き花は落ち、人無きも亦た自ら悠然たり」や、衝鑑章の「評」の「水中の塩味、無に非ず有に非ず」は、仏語禪語を換骨奪胎した表現である。茶文化は唐代以来仏教と関係が深いとはいえず、仏教的表現を織り込んだ茶書は先例が無い。これは宗教的な雰囲気強い、寧波という文化背景が影響を与えたものと見ることもできよう。

第二の特徴は、茶に過度に傾倒する風潮には批判的だということである。侯火章の「評」は、田芸衡の、「松実松枝」を燃料とする思いつきを否定し、弁器章の「評」は、「柴汝宣成」の茶器を貴ぶ許次紵の趣味を迂遠だとする。防濫章と戒濬章の「評」を合わせ読めば、趣味の茶の他に、茶に花果を投ずるような日常の茶を認めていることがうかがえる。過度に爛熟し、風流を求める茶文化を批判し、趣味の茶と日常の茶のバランスを考えている点こそ、『茗笈』の茶文化の特質なのである。

この問題については、明代の茶文化全体の発展を、地理的背景から説明するとわかりやすい。十六世紀前半は、恵山の聴松庵の竹炉の復元を中心とする無錫の茶文化、それを受け継いだ錢椿年や顧元慶に代表される、蘇州の杯泡法の時代である。それが、宜興茶壺の発展、松蘿茶を模した炒製緑茶の普及等により、十六世紀後半の、より洗練された壺泡法の時代へと移行し、茶に花果を入れたり、着香したりすることは否定されていき、高雅にして淡泊な茶の香味が追求される。この時期の茶人を見ると、陳師、許次紵が杭州、張源、張謙徳が蘇州の人であり、龍井茶、天池茶、虎丘茶といった名茶の産地と重なる。その後しばらくして、杭州より南に離れた寧波に於いて著された『茗笈』が、それ以前の茶文化の展開を総合し、体系化する任務を担っていたのは理解できることである。この後すぐ、福州の愈政の手で、『茶経』以来の茶書を集大成した『茶書』が編纂刊行されるが、それも地理的時代的に隣接した出来事なのである。

「江戸時代初期の薩摩焼茶入」

―島津家文書の書状より―

松村真希子

薩摩焼は薩摩地方(薩摩、大隈、日向の三國と宮崎県南部を含む)で焼かれたやきものを指し、時代は一六世紀末から現代までを含んでいる。その始まりは、一六世紀末島津家一七代当主島津義弘が秀吉の朝鮮遠征のおり、当時日本で数が少なかった陶工たちを連れ帰り、四〇人前後が申木野などに上陸した時とされている。薩摩焼は、やきものの種類で分類すると、古薩摩焼と呼ばれる茶陶のグループ、藩主と武家を使う白い陶器のグループ、農民や町人が使う黒い陶器のグループ、磁器のグループ、金欄手のグループの五つに分けられる。この他に焼かれた窯の場所によって、薩摩焼を分類する方法も取られてきた。また、装飾の名前で呼ばれるやきものもあり、鮫肌焼、龍甲手、松皮手、蛇蝸釉、三彩釉や宋胡録など、薩摩焼の種類を多さを示している。

今回の発表は、古薩摩焼と呼ばれる薩摩焼の茶入がどのようなものであったのかを、「島津家文書」からまとめたものである。「島津家文書」は島津家の鎌倉時代から江戸時代末に至る、私的な書状を多く含んだ武家文書で、現在東京大学史料編纂所が所蔵し、一九八一年に鹿児島県が『鹿児島県史料』として編集した。

薩摩焼の茶入が茶会記に記されていることは、以前から知られており、その初見は「宗湛日記」の慶長一〇年(二六〇五)五月二十五日の上田覚甫の茶会である。慶安三年(一六五〇)までに一三回記録があった。しかし茶会記からは、茶入の様相を見て取ることはできない。「島津家文書」の中に記録された茶入について述べた書状を抽出すると、慶長九年(一六〇四)から正保元年(二六四四)までの四〇年間に二八通を見出した。慶長期後半にあたる最初の一〇年間の書状は一九通で、書状の差出人、宛て先は島津義弘だった。また茶入以外のやきものの記録はほとんどなかった。元和・寛永期の書状では三〇年間で九通のみで、一八代当主島津家久宛が主だった。やきものは茶入が減り茶碗と焙烙が見られた。

薩摩焼の茶入が記された書状は、すべて茶入を所望する内容で、そのやり取りから伺われることは、一地方の大名から徳川幕府への大切な贈答品として、茶入が扱われたことである。薩摩焼の茶入は、今までいわれてきたように、隠居した義弘の好みで焼かせた「お庭焼」という性格のやきものではなかったと思われる。

また「島津家文書」の中には、古田織部に

関わる書状が二点、覚書が二点、織部の消息についての書状が数点見出せた。特に注目すべきは織部が薩摩焼の茶入について直接意見を述べた書状があり、茶入の姿かたち、釉薬などを細かく助言をしている。現在伝世している薩摩焼の茶入の中に、この織部の言葉通りに作られている肩衝型の茶入がグループある。伝世している薩摩焼の茶入の「景色」は、釉薬の無造作な重ね掛けにあり、白濁釉が黒い釉薬の下からとところ浮き上がる様子は、織部の言葉と重なる。さらに織部の指示通り、一二〜一〇cmほどの背の高い肩衝茶入も伝世している。胎土は、鉄分を多く含む粗い水簸の土で、厚く成型され重いことも特徴である。織部の指示したような茶入は、島津義弘の居城近くの帖佐宇都窯と御里窯で焼かれたのではないかと推測している。その後島津家久の居城近くに作られた立野冷水窯では、織部が指導した茶入とは異なる姿の茶入が作られた。このように正保元年までの書状を元にして、窯跡の出土陶片の資料を合わせ、伝世品の薩摩焼の茶入をグループ分けし、編年を考えている。

薩摩焼の茶入の今後の課題は、「甫十手」という小堀遠州の注文で作られたという伝承の

茶入があり、それらが解明されていないことがあげられる。伝世品で現在六点(玉水・一葉・幽月・甫十・十寸鏡・楽)知られ、底部や釉掛けに共通の作りがみられる。書状や出土陶片に関わり合いを示す点はまだ見つかっていない。

お知らせ

平成二十一年十一月三日(月・祝)に京都市上京区の茶道資料館主催、秋季特別展『鎌倉時代の喫茶文化』の理解を深めるためのシンポジウムが京都新聞文化ホールで開催されます。参加ご希望の方は、茶道資料館までお問い合わせ下さい。

電話〇七五―四三―一六四七四

ファックス〇七五―四三―一三〇六〇

例会のご案内

東京例会(会場) 五島美術館講堂 午後二時

日時 十一月二十九日(土)

演題 「古渡り更紗展によせて」佐藤留美氏

演題 「特集陳列『茶人が好んだデザイン』

彦根更紗と景德鎮」を振り返って―茶陶としての明の五彩・染付の位置づけ

を考える」 三笠景子氏

日時 一月三十一日(土)

演題 「貴人と相伴者―茶室編―」

岩田澄子氏

演題 「墨蹟研究」 名児耶明氏

東海例会(会場 愛知県陶磁資料館本館講堂)

日時 十一月二十九日(土)

演題 「名物茶入について」 矢野 環氏

演題 「福建省出土の茶入と伝世の唐物茶入」 井上喜久男氏

近畿例会(会場 池坊短期大学第一会議室)

午後二時〜)

日時 十一月十五日(土)

演題 「『仏日庵公物目録』と『天目』の由来

再考―天目真跡と清拙正澄の墨蹟―

岩田澄子氏

演題 「風炉濃茶一杓の水をめぐる諸問題」 廣田吉崇氏

高知例会(会場 高知県立文学館慶雲庵茶室)

午前十時〜)

日時 十二月十四日(日) (変更になってお

ります。ご注意ください。)

内容 「茶の湯の歴史とこれからの茶の湯―

茶の湯から見た日本の政治、行政―」

「茶事」

日時 二月二十二日(日)

内容 「茶の湯と陰陽五行」

このほか、一般の方々茶の湯に親しんで

もらうための茶席を、毎週日曜日を主体(十

時〜十六時)に同所で設けます。

後記

平成二十年度の学会費の納入が未だお済み

で無い方は、会費納入にご協力下さい。宜し

くお願いいたします。

